あとがき

漠然とした計画をし、計画に従い、あるいは寄り道をし、計画を立て直し、その都度その都度、迷走をその内に抱えながらも、一歩一歩その歩みを進めてきた中国散歩。ただ単に運が良かっただけだと言えなくもないけれども、成都から一足飛びのフライトで、チベットのラサへと至る。

ラサはチベット世界の都。そしてチベット仏教の聖地でもある。日本で暮らす僕たちにとっては、そこはまた数々のロマンを感じさせる地でもある。メディアや多くの言脱がこの地と、この地で暮らす人々のことを語る。あるいはそれらのイメージや語りの文法を旅の方法として、あるいは旅そのものを語る文法として用いることもできたかもしれない。もっと詩的に、あるいはもっと魅力的に。だけれども、もちろん僕の方法は散歩的である以外にはない。これまでの過程でもずっと散歩的であったように。

僕の歩く足音が聞こえてくるだろうか。旅の不確かさと同じくらい不確かで、寂しさと不安を基調にしたような、それでいて妙に規則正しいズックの靴音だ。君にもしもその音が聞こえたならば、うれしい。散歩の外から、あらかじめのこととして、そうであらねばならないものとしてやって来る一切のものを、いったん中断すること。僕と、僕の踏み出す一歩との間にある種の真空を確保すること。そして、出来事や情景が僕という既成観念に触れて酸化してしまう前に、それそのものを感じるということ。そのことをおそらく僕は考えているからだ。酸化した言葉からは寂しさや不安を基調にしたような足音は聞こえてはこないだろう。（おそらくと言うのは、中国散歩報告Ⅳを書きおえたあとで、あらためてそのことに思い当たっているからだ。僕はもちろんそれほど自覚的に書き進めてきたわけではない。）

チベットや、ラサから敦煌へと至る山岳地帯、あるいは砂漠地帯を黙々と旅しながら、しきりに僕の脳裏を過ぎったのは「外部」という言葉だった。それはおそらく、中国であり中国ではないというチベットの特殊性や、チベット高原、あるいは砂漠地帯の自然の厳しさというものが、僕にその発想をうながしたのだろうと思う。そのこと自体はそんなに悪い発想ではないとは思うけれども、今振り返ると抽象的な思考によって旅をくくってしまったのではないかという悔いのようなものを感じる。だが、それも悪くはない。

延々と果てしのないようにも思われる砂漠のただ中で、僕は一匹のアリのことを考えていた。砂漠のただ中で一匹のアリが「私だ！」と絶叫している図。それは自我というものの滑稽さを漫画的に表わすものだけれども、それが百匹も集まれば「私だ！」「私だ！」の相互了解がひとつの文明を生むかもしれない。文明は「私だ！」を制度とし、その切実さを骨抜きにし、あるいは無数の「私だ！」を推進力にして、離陸する。しかし文明を批判するために釈迦の手の平のような砂漠をもってくることはない。僕にとって大切だと思われることは、そこに砂漠をもってくることではなく、最初の一匹の「私だ！」に戻ること。こっけいなほど卑小な、しかしその一匹にとっては世界そのものに匹敵するような切実な叫びに立ち返ることだと思う。文明に対して自然を対置する論を僕は信じない。「外部」というものがあるのかどうか僕は知らない。ただそれは自然として、実体としてあるものではなく、もっとずっと切実なものとして開かれていくものだという気がするのだ。

さて、チベット、敦煌から蘭州を経て、中国散歩も峠を越えた。あとは一路戻り道をたどるだけ、と思いきや、さにあらず。中国のふところは深く、広く、最終章は遠いのだ。